

リニューアルオープン記念 特別展

2023年4月15日(土)～9月10日(日)

文豪 新生

～谷崎、阪神間へ・100年の一歩～

「関東大震災直後の
浅草凌雲閣」

谷崎潤一郎は、1886(明治19)年東京に生れたが、1923(大正12)年の関東大震災を逃れ、阪神間へ移住する。

震災の頃、谷崎の眼に映っていた東京は、乱脈な近代化の進行と立ち遅れた貧相な生活文化との、醜悪な習合であった。そんな東京を「みんな焼けちまえ」と呪い、震災の廃墟のおこうに「西洋化の徹底」としての「理想の近代」の復興を夢見ていたモダニスト谷崎。一方、阪神間移住後の谷崎は、震災の後にも相変わらず薄っぺらで乱雑な東京の有様への嫌悪も背景に、「西洋かぶれ」のモダニズムから、関西の豊かな風土に根づく日本の伝統的な文化と美意識へと、その作品の基調を移していった。

阪神間への移住を転機とした、作家谷崎の歩みは、やがて名作「細雪」にたどり着く。それは、みずばらしい東京の「醜い近代」にかわる、伝統に根ざした日本のモダン、関西の生活文化を土壌とした豊かで美しい理想のモダンの文学上での結実であり、文豪谷崎新生の記念碑でもあった。

故郷東京への屈折した思いを背負いながら、関西の風土と文化の影響の下で、大文豪へと開花していった谷崎潤一郎。関東大震災から100年、阪神間への旅立ちが第一歩となった、作家谷崎の文豪としての新たな誕生の様相を跡づけた。



「1923(大正12)年9月
関東大震災を逃れて
芦屋にたどりついた谷崎」

秋の特別展

2023年9月16日(土)～12月10日(日)

モノたちの物語り

～展示資料を楽しむ～



「谷崎臨終の文机」

展示ケースの中のモノたちには、それぞれに物語がある。ふつう、そんなモノたちの発するさまざまな言葉(情報)は、選り分けられ寄せ集められ、たとえば文豪谷崎を主役に立てた展示という「大きな物語」の一部として仕立て上げられていく。秋の特別展では、そんな展示資料の方こそを主人公にしてみた。



戦禍をくぐり抜けての「細雪」執筆刊行の事情と谷崎の人となりをよく表した肖像画の横顔からは、文豪の「きかん気」らしさが滲み出す。「細雪」ゆかりの琴も戦火を免れ、名作のエッセンスを戦後に伝えている。文豪の堂々たる人生の大団円を象徴する祝い皿は、稀代の「食いしん坊」谷崎らしいしつらえである。死の直前まで新作の構想を練っていた谷崎臨終の文机は、その伝来の逸話とともに重厚な構えが印象的。猫好きの谷崎が、とりわけ愛し、剥製にまでした一匹。俵屋宗達の源氏絵は、激動の歴史の中での数奇な生い立ちを背負う逸品である。谷崎邸の調度として、その日々の生活を彩った絵画たちは、文豪お気に入りの名品揃い。傑作完成の記念碑ともいえるヒロインをモデルにした肖像は、その制作過程や技法も興味深い佳作。代筆原稿とその背景にも、さまざまな事情があるように、一筋縄では行き届かない。

大きな筋立てを構えず、モノたちの言葉そのものの、そのひとつひとつの物語りにじっくりと耳を傾けた。

冬の特設展

2023年12月16日(土)～2024年3月10日(日)

谷崎が棄てた「細雪」

～反古原稿の中の名作～



『細雪』
下巻反古原稿

7枚の「細雪」反古原稿は、岡山県勝山町の、谷崎の疎開先宅に遺されていた。戦後、1945(昭和20)年末より翌年にかけての滞在中に、書き棄てられたものである。

内容は、下巻の10章～11章にあたる。が、話の流れは大きく異なり、妙子(こいさん)と以前の恋人・奥畑啓三郎(啓坊)との結婚が進むように展開。彼女の未来は、穏やかなものとなりそうだ。今見る作品終末の、妙子を覆う暗澹とした運命は、入り込む余地が無い。

戦争を掻い潜るように執筆された「細雪」。その中でも、敗戦をはさんで新しい時代へと書き継がれた下巻。世の転変の下で谷崎が棄てた、7枚の原稿が物語るものを読み解いてみた。

春ロビーパネル展

「谷崎の見た芦屋、谷崎の生きた芦屋」

「芦屋本通り商店街」

1937(昭和12)年



100年前の1923(大正12)年9月、関東大震災を逃れた谷崎潤一郎は、その後20年ほど、阪神間に暮らす。そのうち芦屋住まいは、足掛け3年。が、震災の後、命からがらの谷崎が、最初にたどりついたのが芦屋。また、最期の妻ともなる「運命の女性」松子夫人との同棲を始めたのも芦屋で、この地との縁は深い。

名作「細雪」の舞台となったのも、芦屋への谷崎の愛着の表れだろう。

文豪が足を運び、眼に映しもしたことだろう、昔日の芦屋の風景をテーマとしたパネル展示。



第37回 残月祭

痴人の愛

対談 いとうせいこう・奥泉光

【会場】「谷崎」

【日時】

【料金】

【予約】

【問い合わせ】

【主催】

【協賛】

【後援】

【協力】

【特別協力】

【企画】

【実行】

【協力】

【協力】

【協力】

【協力】

【協力】

【協力】

【協力】

【協力】

【協力】

【協力】

いとうせいこう・奥泉光 対談

谷崎潤一郎 「痴人の愛」

文豪・谷崎潤一郎を偲び、誕生日を祝う『残月祭』。今年から、より多くの方々にお越し頂こうと、これまでの慣例であった誕生日当日(7月24日)の開催から、誕生日に近い土日での開催となり、23日(日)に芦屋ルナ・ホールにて行った。

今回は、作家・クリエイターのいとうせいこうさんと小説家・奥泉光さんのお二人にお越し頂き、「痴人の愛」について自由にお話し頂いた。お二人の恒例イベント「文芸漫談」スタイルで、舞台の中央にホワイトボードを掲げ、奥泉さんが分析・解説され、そこにいとうさんの素早く鋭い突っ込みが入り、お二人で「痴人の愛」を読み解く大変楽しい対談であった。会社員の譲治が浅草のカフェの女給ナオミを見初めて一緒に暮らすものの、彼女の性的な魅力に征服されていく本作について、会社員という新中間層(譲治)に向けて、浅草の下層社会(ナオミ)から攻撃をかける物語と捉えた。さらに、ナオミが変化していくさまを『怪物成長期』『蠢動期』など五段階に分けて分析され、譲治が屈服されていく様相を跡付けられた。

お二人の楽しい掛け合いに会場は終始笑いが絶えず、来場者は谷崎文学の世界を堪能した。

2023.4-2024.3

芦屋市谷崎潤一郎記念館